

◎熱帯林業講座◎

く、冬には暖かく感じられる。しかし、年平均土壌温度が 22°C 以上の Hyperthermic soil temperature regime である熱帯地方では、どんな新鮮な湧き水でも生暖かくしか感じられず、残念ながら手の切れるような冷たい湧き水で喉を潤すことはできないのである。

そのような熱帯地方の土壌では、土壌動物や微生物などの活性度が非常に高く、土壌有機物の分解が活発に進行するので、林木から土壌に還元されるリター量の割には土壌中の有機物量が少ないと考えられている。このような土壌温度レジームに用いられている用語は、これまで無かったものであるから最初は少なからず取っ付き難いが、一旦馴れてしまうと、土壌を分類する時のみならず、いろいろな土壌温度環境を語る場合などに大変威力を発揮するなど、なかなか重宝である。ちなみに、FAO/UNESCO の世界土壌図のための分類でも、Soil Taxonomy の土壌温度レジームをそのまま借用していることを付け加えておく。

図書紹介

◎チークのモノグラフ (TEWARI, D.N.: A Monograph on Teak (*Tectona grandis* Linn. f.) 1992. 479 pp. International Book Distributors, Dehra Dun, India 邦貨約 9,500 円)

本書の著者は、すでにニーム、タケ、ユーカリ、ポプラおよびマツなど多くの樹種についての有名なモノグラフを書いている Dr. D.N. TEWARI であり現在インドの林業研究教育評議会議長であり、その前は Madhya Pradesh にある Bilaspur 大学の副学長であった。

この本はチークの膨大な文献を駆使して纏められており、その内容目次は、チークの分布、形態、木材解剖、造林と経営、物質生産と養分循環、遺伝育種、成長と収穫、市場と貿易、木材利用、非木材産物、病害、虫害、虫害管理およびチークに関する文献の 14 章からなっている。特に文献として収録されているのは、過去 150 年に渡って、インド内外で公表された文献で、その数は 4,000 点以上に及び、それだけでも貴重な文献集といえよう。

言うまでもなく、チークは歴史的に見ても世界で最も重要な木材の一つであり、熱帯の造林樹種としても、陽性の樹種だけに 2 百万 ha 前後 (1990 年, FAO) の造林面積を占めており、東南アジアだけでなく熱帯各地に植栽されている。それだけに、このモノグラフは今後のチークに関する取り扱いや知識の拠所として、大いに役立つ優れたモノグラフである。 (加藤亮助)